

令和4年度

北海道教育大学

附属函館幼稚園だより

NO. 7【号】



絵本の主題と選書の視点

附属函館幼稚園園長 外崎紅馬

日常会話の中で定番となっている話題のひとつに、「学生のとき、何部だった?」「何かスポーツやった?」というものがある。かくいう私は、小中学校で陸上、高校では弓道、大学では少林寺拳法をやっていた。体を動かすことは嫌いではないので、現在は体力維持のため近所の公園でときどきジョギングをしたり、体型維持(?)のため部屋で筋トレやストレッチを行っている。

一方、子どもの頃から少し不得意に感じていたスポーツは、ボールを使って行う団体競技だった。チームプレーが苦手なのである。ドッチボールは大好きだったが、野球やバスケ、バレーボールなどにはあまり夢中になれなかった。特に野球は、攻撃側になっても自分に打順が回ってくるまで、もしくは塁にでるまで、ベンチで座って見ているという状況なので、攻撃しているという実感が得られにくく興味を持てなかった。

しかし、この夏は違った・・・。

高校野球である。私は生まれが青森のため、東北出身者にとって深紅の大優勝旗がいわゆる白河の関を越えるということは悲願なのである。野球にそれほど興味を持っていない私でさえ、甲子園で東北勢が優勝する瞬間を見たいと思っているのだから、野球ファン、とりわけ東北の高校野球ファンにとってはなおさらだろう。

今年の準決勝は、宮城県と福島県の東北勢同士の試合となり少しもったいない気がしたが、確実にどちらかが決勝に進むことになるため優勝を争える試合をみることができると。準決勝は宮城県の勝利となったが、その戦いぶりから、これはもしかしたら優勝を狙えるのではないかと、ひょっとしたらひょっとするのではないかと、多くの東北人がそう思ったはずである。そして、2022年 夏 東北の夢がついにかなった・・・。

勝者がいれば、敗者がいる。努力は必ずしも思い通りの結果をもたらすとは限らない。映画やドラマ、昔話、おとぎ話、童話等、物語の結末はハッピーエンドのものが多い。しかし、ハッピーエンドではない物語からのほうが、その後の人生にとって有益な学びをもたらすことが本当は多い。

甲子園決勝で敗れた選手の振る舞いや言動、気持ちの処し方に触れ、それを心に刻むことは、自他への思慮を深め、より豊かな人間性を育むこととなる。読み聞かせなどの際、ハッピーエンドではない物語も選書し提供することはとても意味のあることなのである。

